

学校嫌い感情に及ぼす孤独感ならびに  
自己の肯定的受容傾向の影響について<sup>1), 2)</sup>

Effects of loneliness and self-acceptance  
on school-aversion

高橋 宗・水野邦夫・興津真理子・吉川栄子・上西恵史  
(TAKAHASHI Shu, MIDZUNO Kunio, OKITSU Mariko, YOSHIKAWA Eiko, & JONISHI Keishi)

要 約

本研究は、さまざまな学校嫌い感情に孤独感や自己の肯定的受容傾向がどのように影響するかについて検討した。87名の大学生、専門学校生にアンケート調査を実施し、各自の学校嫌い感情や、孤独感、自己受容感、自己信頼感などへの回答を求めた。その結果、まず、学校嫌い感情は「对学校嫌悪」・「学校消滅願望」・「学校回避」の3つの下位感情に分かれることが示された。次に、これらの感情への孤独感、自己の肯定的受容傾向の影響を調べたところ、すべての学校嫌い感情において、孤独感が影響していることが明らかとなった。また学校回避については、自己の肯定的受容傾向が負に影響していることが示された。以上のことを承けて、学校現場においては、早期に友人関係ネットワークを構築する働きかけを行うこと、学生や生徒・児童の自信を高めるためのプログラムを準備すること、個別的なケアや多様な価値基準に基づく評価の必要性などについて論じられた。

**Key Words** : 学校嫌い感情、孤独感、自己の肯定的受容

はじめに

文部科学省(2001)の調査結果によると、国・公・私立の小・中学校で、平成13年度に「不登校」を理由として30日以上欠席した児童生徒数は、小

1) 本研究は、平成15年度聖泉大学総合研究所特別共同研究費の助成を受け、その一部として行われた。

2) 本研究は、関西心理学会第115回大会(平成15年10月19日開催、於 甲南女子大学)において口頭発表された。

小学校 26,511 人、中学校 112,211 人の合計 138,722 人となり、調査開始以来最多となった。これを全体の児童生徒数との割合で見ると、小学校では 275 人に 1 人 (0.36%)、中学校では 36 人に 1 人 (2.81%) となり、小・中学校の全児童生徒数の約 1.2% を占めるに至っている。このように不登校は、特定の子どもに問題があることによって起こるのではなく、どの子どもにも起こりうる状況になってきていることを認識する必要がある。

一方、不登校の要因や背景について、先の文部科学省 (2001) の調査によると、不登校状態が継続している理由 (不登校の態様・タイプ) として、平成 13 年度においては「不安など情緒的混乱」が 26.1%、「複合 (的な理由)」が 25.6%、「無気力」が 20.5% となっている。最近では、「複合」による割合が増加しており、不登校の要因・背景の多様化がみられる。また、小学校においては、「あそび・非行」型の占める割合は 0.7% であるのに対して、中学校では 13.6% と増加していることが目立っている。

不登校の発生要因には、家庭、学校、本人に関わる様々な要因が複雑に絡み合っていることが多いと考えられる。特に最近では個人の生きがいや関心といった、私的な問題に起因することが多く、学校の社会的な位置づけの変化や学校に対する保護者・子ども自身の意識の変化などによる影響も大きく関係していると考えられる。したがって、不登校要因は多様であることから、学校のみでは解決することができにくい課題に変化しつつあるといえる。また、不登校という状況が継続することは、本人の人生にとってや社会の中で自立していくために望ましいことでないことは明白なことである。そのために具体的な支援プランや対策の検討が非常に重要な問題になってきており、社会全体の問題として認識していくことが求められている (石川, 2000; 森口・奈浦・川口, 2002; 詫摩・稲村, 1993)。

現在の「不登校 (non-attendance at school)」は「疾病や経済的な理由がないにもかかわらず、学校に行かない、あるいは行けない現象」としてとらえられている。それまでは、学校に行かない状況を「怠学 (truancy)」や「登校拒否 (school refusal)」、また「学校恐怖症」などでもって大きく説明さ

れていたのである。その場合、「怠学」は、「学校に行きたくないから学校に行かない」場合のことであり、「学校に行きたくない」といった明らかな動機が焦点となっている。それに対して、「登校拒否」や「学校恐怖症」は「学校に行きたいが学校に行けない」といった、気持ちはあるが学校には行くことが出来ないといった状況を示すものである。

「不登校」という言葉が使われるようになったのは、1980年代の後半と言われている。すなわち、学校に行きたくない子どもが急速に増加し「登校拒否」が社会問題となり、学校に行かない子ども全体を意味する言葉として広範囲に使用されるようになり、「不登校」と言われるようになった。一方、文部科学省の学校基本調査の用語としては、30日以上欠席（2000年度までは50日以上欠席）基準の内、「経済的理由」「病気」を除いたものを「長期欠席」や「学校ぎらい」（2001年度から「不登校」と呼ぶ）または「学校不適応」などの言葉が使用されている。また、森田（1991）は、社会学の立場から不登校を「生徒本人ないしはこれを取り巻く人々が、欠席ならびに遅刻・早退などの行為に対して、妥当な理由に基づかない行為として動機を構成する現象」と定義している。しかし、この定義の中に遅刻や早退も入るので、小林（2003）は不登校の初期的段階については「不登校傾向」として区別している。一方、稲村（2001）が指摘するようにDSM-IV-TR精神疾患の診断・統計マニュアル（高橋・大野・染矢，2002）に学校恐怖症や登校拒否の項目は見当たらず、不登校は疾患や症候群としてとらえる方向から一つの症状とみなす方向にあるといえる。

ところで、不登校の問題を示す子ども達は、行動や意識面で多様な問題を示すことが明らかになっている。前述の文部科学省（2001）の不登校に関する調査（なお、この調査研究は、現代教育研究会〔代表：森田洋司・大阪市立大学教授〕が文部科学省の委託研究として行ったものである）でも、この点について具体的な報告がなされている。調査対象は、平成5年度に中学3年生で30日以上欠席した者26,000人全員に対して、20歳の時点での現状とそれまでの経過を追跡した不登校の全国予後調査研究結果の報告である。

調査は、中学3年の不登校時点での行動や意識状態に関して20項目の質問を行っているが、その回答について主成分分析（後の因子分析）を行い、「安心空間志向」、「離脱志向」、「方向喪失」、「フラストレーション傾向」、「学歴志向」、「自我防衛」の因子を得ている。これらのうち「自我防衛」の因子は、「自己を肯定できず」、「対人関係が十分にできない」といった項目や「不安や焦燥感を示す」といった項目が高く負荷しており、「登校したいができない」といったことを意味するとされている。それに対して「離脱志向」の因子は、「夜遊びをする」、「家から外出する」、「学外の友人とつきあう」などの項目に関連している項目が高く負荷しており、学校や家庭などの日常の場に「居場所」が感じられないことを示すものと考えられている。小林（2003）は、不登校時の「不登校の態様分類」と「行動や意識」との関連を「学校生活の問題」、「情緒的な混乱」の両タイプが「自我防衛」と関連し、「非行・遊び」、「自ら好んで」の両タイプが「離脱志向」と密接な関連を持っていると指摘し、前者を「神経症的登校拒否」、後者を「怠学」であり、この2つのタイプがこれまでの不登校を示すと述べている。しかし前述の文部科学省（2001）では「方向喪失」の因子が見出されていることから、先の2つのタイプのほかに「無気力」タイプが存在しており、このタイプは、他者を拒否しないが目的を喪失し、無気力感が前面に出るおとなしい一群であると考察している。また、無気力タイプはこれまでのタイプの間中に位置しており、10数年前から指摘されるようになった「明るい登校拒否」や「悩まない登校拒否」に関係するタイプとも説明している。このように、不登校の心的状態はさまざまな側面がみられることが明らかにされており、その状況は多様な様相をもっていることが窺える。また、時代的变化が社会や環境の変化を生じさせ、不登校の様相にも変化をもたらしつつあるとみることができる。

以上のように、不登校は深刻な社会問題であると同時に、その背景にはさまざまな要因が潜んでいると考えられるが、本研究では、学校に対するネガティブなイメージからくる不登校を中心的なテーマとして取り上げる。そのネガティブイメージを「学校嫌い」として捉え、学校嫌いがどのような要素から構成されているかを調べるとともに、それぞれの構成要素について、ど

のような心理的要因が関与していると考えられるかを検討することを目的とした。

## 方 法

**被調査者** 大学生及び看護系専門学校生 87 名（男子 42 名、女子 45 名、いずれも 1 回生）に対し、下記質問紙への回答を依頼した。

**質問紙** 調査にあたり、「自己についての調査」と称して、自尊感情尺度（山本・松井・山成, 1982、計 10 問）、自己受容尺度（田中（2002）による居場所機能尺度をもとに作成した計 5 問）、UCLA 孤独感尺度（工藤・西川, 1983、計 20 問）、友人関係孤独感尺度（広沢・田中（1984）の異なった関係における孤独感尺度から友人関係に関する 10 問を抜粋した）、信頼感尺度（天貝, 1995：自己への信頼 6 問、他者への信頼 8 問、他者不信 10 問）、学校ざらい感情測定尺度（古市（1991）による 12 項目のうち、「今のクラスはよくないので、ほかのクラスに変わりたい」を除く計 11 問）、エゴグラム AC 尺度（杉田, 1987、計 10 問）の各尺度項目等についてたずねる質問紙を作成した。なお、尺度への回答は、すべて 5 段階で評定できるようにした。

**手 続 き** 被調査者に上記質問紙を配付し、大学生には回答のうえ後日提出するように、専門学校生には授業時間の一部を利用してその場で回答するように、それぞれ求めた。

## 結 果

**学校ざらい感情尺度の因子分析** 学校ざらい感情尺度は、内的整合性が高く（Cronbach の  $\alpha$  係数値は .883）、第 1 主成分の説明率もやや高い（47.5%）ので、1 因子性のものと考えられる。しかし、学校嫌いの諸側面を調べるために、敢えて因子分析（主成分解、プロマックス回転、解釈可能性等から 3 因子に指定）を行った（累計寄与率は 70.1%）。因子負荷量行列を表 1 に示す。因子負荷量をもとに各因子を解釈すると、まず第 1 因子は、「学校に来て何もうれしいことはない」、「今の学校がいや、転校したいと思うことがよくあ

表1 学校ざらい感情尺度の因子パターン

	I	II	III	$h^2$
学校に来て何も楽しいことがない	.913	.000	-.108	.759
今の学校がいやで、転校したいと思うことがよくある	.850	.077	-.074	.726
私はこの学校が好きだ (逆転項目)	.812	-.235	.231	.735
学校ではいやなことばかりある	.471	.327	.096	.525
学校にいるとき、よくゆううつになってくる	.427	.387	.279	.735
学校さえなければ、毎日楽しいだろうと思う	-.198	.924	.118	.833
できれば学校なんかなくなればよいのと思う	.135	.913	-.198	.813
日曜の夜、また明日から学校かと思うと気が重くなる	-.009	.538	.413	.640
朝、なんとなく学校に行きたくないと思うことがある	-.112	-.096	.969	.796
学校にいるのがいやで、授業が終わったらすぐ家に帰りたい	.107	.147	.644	.600
学校をやめたくなくなることがある	.304	.052	.528	.550
寄 与	2.973	2.505	2.235	
	因子間相関			
	I	II		
	II	.396		
	III	.437	.422	

る」、「私はこの学校が好きだ〔逆転項目〕」などが高く負荷しており、「対学校嫌悪」と解釈した。すなわち、基本的な学校嫌い感情であるといえよう。次に第2因子は、「学校さえなければ、毎日楽しいだろうと思う」、「できれば学校なんかなくなればよいのと思う」などが高く負荷しており、「学校消滅願望」と解釈した。第3因子は、「朝、なんとなく学校に行きたくないと思うことがある」、「学校にいるのがいやで、授業が終わったらすぐ家に帰りたい」などが高く負荷しており、「学校回避」と解釈した。

自己・他者観データの集約 自己や友人関係に対する尺度（自尊感情尺度、自己受容尺度、UCLA 孤独感尺度、友人関係孤独感尺度、信頼感尺度、エゴグラム AC 尺度）については、概念的にもかなり類似していることもあり、相互の相関は概ね高い傾向にあった。そこで、これらの尺度データを集約するために、8つの尺度得点について因子分析を行った。なお、手法は先と同

表2 自己観・他者観に関する尺度の因子パターン

	I	II	$h^2$
自分への信頼	.903	.096	.749
自己受容	.864	.001	.745
自尊感情尺度	.830	-.101	.773
エゴグラム AC	-.381	.210	.260
友人関係孤独感	-.053	.880	.818
UCLA 孤独感	-.119	.847	.821
他者への不信	-.055	.520	.299
他者への信頼	-.110	-.761	.518
寄与	2.503	2.480	
因子間相関	-.440		

様（主成分解、プロマックス回転）であり、解釈可能性等から因子数は2因子に指定して行った。因子負荷量行列を表2に示す。表2から各因子について解釈すると、まず第1因子は、自己への信頼、自己受容、自尊感情が高く負荷しており、「自己の肯定的受容」と解釈した。次に第2因子は、友人関係孤独感、UCLA 孤独感、他者不信が正に、他者への信頼が負に、それぞれ高く負荷していることから、「孤独感」と解釈した。

学校嫌いに及ぼす自己・他者観の影響 学校嫌いに自己の肯定的受容や孤独感がどのように影響するかを調べるために、学校嫌いの各因子を目的変数、自己の肯定的受容、孤独感を説明変数とした重回帰分析を、目的変数ごとに独立に行った。その結果を表3に示す。

表3 重回帰分析の結果

	$\beta$		
	对学校嫌悪	学校消滅願望	学校回避
自己の肯定的受容	-.196 <sup>+</sup>	-.101	-.390 <sup>***</sup>
孤独感	.378 <sup>***</sup>	.354 <sup>**</sup>	.241 <sup>*</sup>
$R^2$	.247 <sup>***</sup>	.168 <sup>***</sup>	.293 <sup>***</sup>

註：\*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$  + $p < .10$

表から、1) すべての学校嫌いに孤独感が有意に関与していること、2) 学校回避には自己の肯定的受容が負の方向に（すなわち、自己の否定的拒絶として）有意に関与していること、などがわかる。

## 考 察

重回帰分析の結果を見ると、まず、孤独感はどのタイプの学校嫌いに対しても影響を及ぼしていることがわかる。榎本（1997）は青年期の自己開示について、最も多く開示をする相手は同性の友人であることや学年が進むにつれて開示度が高くなることなどを報告しているが、このことは青年期における生活の中心が親子関係から友人関係へと本格的に移行していることを示しているといえよう。そして、その際学校はそのような関係を具体的に営む場としての役割を果たすことになるであろう。そのような場で孤独感を感じ、クラスメート（あるいはクラブ活動などでの友人）や先生などとの間に適切な信頼関係が築けずにいれば、学校に対して「居場所のなさ」を感じ、ネガティブなイメージを形成していくことは十分に考えられることであり、今回の結果はその表れであるとみることができよう。それゆえ、学生や生徒・児童の学校嫌い（ひいてはその延長線上にあると思われる不登校）を低減するためには、学校場面での孤独感をいかに低減させるかが重要であろう。学校現場では、早期に友人関係のネットワークが構築できるような働きかけを行っていくことが有効であるといえよう。

しかし、Russell, Peplau, & Cutrona (1980) は、孤独感を感じやすい人は性格的に抑うつ的、内向的、自尊心が低い、不安を感じやすいなどの傾向があることを、Jones, Hobbs, & Hockenbury (1982) は、孤独な人ほど社会的スキルに欠けていることをそれぞれ見出している。このことから、孤独感を感じやすい人は、そもそも積極的に人間関係を形成するのが苦手であると考えられる。それゆえ、単に働きかけを行うだけでは、彼らが学校場面で孤独感を低減させることにはならず、むしろ却って孤独感をより強めてしまう恐れもあろう。今後は孤独傾向の強い学生、生徒・児童に対する個別的ケアを



行っていくことも重要であろう。

次に、「学校回避」は自己の肯定的受容との間にも有意な（負の）関係がみられたが、同様のことは、鹿児島県総合教育センター（2002）でも示されている。学校回避についてのみ自己の肯定的受容と関連がみられたことは興味深い結果であるといえるが、これは以下のように考えることができよう。まず、自己受容感の低い者－すなわち自分に自信がない、自分はだめな人間だと思っているような者－は社会的な場面において、自己の行動がもたらす結果に対して否定的な評価を下しやすく、それが強化子となって、自己否定的な傾向を強めていくと考えられる。一方学校場面には、学業成績（勉強やスポーツができるかどうか、など）や学級適応度（友だちがいるかどうか、クラス内での地位はどうか、など）をはじめ、不十分な場合には他者（クラスメートや先生、親など）からも否定的な評価を下されやすい材料が多くあり、しかもそれらは学校生活において主要な位置を占めている。そうすると、自己受容感の低い者にとって、学校は「やはり自分はだめな人間だ」というネガティブな評価をいっそう下しやすい場になり、「学校へ行きたくない」という感情を生じさせるのであろう。

ところで、「学校回避」は「对学校嫌悪」や「学校消滅願望」と類似した感情ではあるが、对学校嫌悪が学校に対する単なる否定的評価であり、学校消滅願望が「学校さえなければ、行かなくて済むのに（すなわち、学校はなくならないので、行かなければならない）」という消極的な不登校願望であるのに比して、学校回避は「学校に居たくない」という積極的な学校拒絶であり、不登校と最も関連の深い学校嫌い感情と考えることができる。それゆえ、学校回避感情の低減は、不登校の予防を考えるうえで非常に重要であると思われる。先にみたように、学校回避感情は孤独感に加え、自己の肯定的受容傾向が影響している。ゆえに、自己の肯定的イメージを高める配慮が必要になろう。学校現場においては、学生や生徒・児童の自信を高めるためのさまざまなプログラムを用意することは検討に値しよう。また今後は、「勉強やスポーツができること」や「友だちがいること」だけが評価材料となる

のではなく、多様な価値基準の中で個々人が評価される必要もあろう。

### 引用文献

- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, **43**, 364-371.
- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 古市裕一 1991 小・中学校の学校ざらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, **24**, 123-127.
- 広沢俊宗・田中國夫 1984 異なった関係における孤独感尺度の構成 関西学院大学社会学部紀要, **49**, 179-188.
- 稲村 博 2001 不登校の研究 新曜社
- 石川瞭子 2000 不登校と父親の役割 青弓社
- Jones, W. H., Hobbs, A. S., & Hockenbury, D. 1982 Loneliness and social skill deficits. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 682-689.
- 鹿児島県総合教育センター 2002 不登校への予防的対応に関する研究 研究紀要(鹿児島県総合教育センター), **100**. (ただし、<http://www.edu.pref.kagoshima.jp/er/tyousa/kiyou/dai100/mokuji.htm> より引用)
- 小林正幸 2003 不登校児の理解と援助 問題解決と予防のコツ 金剛出版
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(1)―孤独感尺度の信頼性・妥当性― 実験社会心理学研究, **22**, 99-108.
- 文部科学省 2001 不登校に関する実態調査 平成5年度不登校生徒追跡調査報告書
- 森口秀志・奈浦なほ・川口和正(編) 2002 ひきこもり支援ガイド 晶文社
- 森田洋司 2000 「不登校」現象の社会学 学文社
- Russell, D. Peplau, L., & Cutrona, C. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale : Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 472-480.

- 杉田峰康 1987 交流分析 講座サイコセラピー 8 日本文化科学社
- 高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸 (訳) 2002 DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院
- 詫摩武俊・稲村 博 (編) 1993 登校拒否どうしたら立ち直れるか 有斐閣選書
- 田中順子 2002 思春期・青年期の「居場所」の心理的構造: 具体的場面・「居場所」感情・「居場所」機能の観点からの検討 上智大学大学院文学研究科修士論文 (未公刊。ただし、<http://pweb.sophia.ac.jp/~y-aketa/thesis/2002/mt02-04.pdf> より引用)
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.